

大火と復興

匠 探訪
201

市内には大火に見舞われた集落が何カ所かあります。その中で最大のものは村全体の約7割、300軒ほどが焼失した1840(天保11)年の「八日市場村の大火」でしょう。

2月1日夜8時ごろ田町から出火、田町坂下に類焼し、おそらく強い西風にあおられたのでしよう。本町、横町、天王宮

(八重垣神社)や見徳寺、門前(万町)なども焼失、町中商家の土蔵40ほど焼けた「誠に近年めずらしか大火災なり」と記録にあります。

大火から数年たっても「焼け出された村人は住む家も無く困り果てた」状況を村の支配者に訴えています。その一方で当時の八日市場村は1804(文化元)年の記録で、

梁に書かれた文字

屋号から商家とみられるものが50軒余りあり、取引のある近隣の商家などからの見舞いなどもあってか早期に再建てきたものもありました。

昨年末に閉店した多田屋の建物は何度かの改装を経ています。骨組みは大火後、約1年半で上棟しました。写真に見られるように「棟上げ天長地久大

吉」と力強い文字で墨書きされた梁には、1841(天保12)年9月上棟とあります。

現在でも中央地区の家並みに残る土蔵などは同様に大火後、時を経ずして建てられたでしょう。それから20年後の1863(文久3)年、九十九里地方を舞台に140人ほどの集団が「世直し」を掲げ、地域の裕福な商家や農家を襲った「真忠組騒動」や同様に豪商が狙われた1866(慶応2)年の八日市場村の「打ちこわし」、1868(明治元)年の水戸藩天狗党の乱暴狼藉などの被害からも復興しました。

商店街を中心とした八日市場村は、明治10年代には人口の多さで県下11位の「名邑」にも上げられ、大正時代の「初市の売出しのにぎわい」なども広く知られていました。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

閩秘書課広報聴聴班

☎73・0080

